

資料 折口信夫・國學院大學 昭和十一～十四年講義

日本文学史・平安一 石上順ノート

伊藤 高 雄

(本学兼任講師)

共編

柏木 義 樹

(神奈川県立相模田名
高等学校教諭)

〔凡例〕

・本資料は、国文学者、折口信夫（釈迢空）が昭和十一年から昭和十四年まで、國學院大學（渋谷）において行なつた講義を、学生で門弟の石上順氏が筆記・整理したノートの一部である。

・資料の解題は、國學院大學研究開発推進機構・折口博士記念古代研究所刊の『折口博士記念古代研究所紀要』第十二輯（平成二十三年七月）に報告し、本学紀要第四十八号、四十九号、五十号、五十一号、五十二号、五十三号、五十四号、五十五号にその整理番号7萬葉集卷一ノ一、8卷一ノ二、11卷十四ノ一前半、11卷十四ノ一・二十ノ一、12卷十四ノ二、12萬葉集二十ノ二、18日本文学 平安、4日本文学 平安二を翻刻したが、本翻刻は整理番号6日本文学 古代・室町2、整理番号2日本文学 平安一を翻刻するものである。整理番号6日本文学 古代・室町2は昭和十三年度の國學院大學学部、国文学史、上代―中世とあつて上代と室町を隔週にテレコで行つたもので、近畿迢空会の『釈迢空研究資料 特輯号―折口信夫先生文学史講義のうと―』（昭和四十三年）に翻刻されているが、ここに取り上げたものはそこに未翻刻の九月二十二日、二十九日分で、日本文学における読者の問題をとりあげたものである。また、整理番号2日本文学 平安一は、整理番号3日本文学 平安二と合わせて、ひとまとまりとなるもので、國學院大學学部、国文学史、上代―中世の講義

で、講義年度は筆者石上順氏が在学した昭和十一年から十四年までの間ではあるが、詳細は不明である。整理番号2には五月十一日、二十七日、六月四日、十日、二十四日、十月七日、十四日、二十日、二十八日の九回分、整理番号3には十一月十一日、十二月二日、九日、十六日、一月二十日五回分をおさめる。今回の翻刻では分量の上から、整理番号2の五月十一日、二十七日、六月四日の三回分の講義を収録する。

・ 原本（ノート）は横書きの速記本。表記は原則として漢字は常用漢字とし古典的仮名遣いとしたが、場合によって正字を用いた場合もある。
 ・ 判読できない箇所は□で示したが、筆者（石上順）の注記などをもとに判断し、補った場合もある。
 ・ 本ノートは、伊藤が翻刻し、郷田典子氏（元國學院大學大学院生）と読み合わせの後、伊藤が整理したものを、柏木義樹氏（神奈川県立相模田名高等学校教諭）が改めて読み直し、伊藤が最終的に整理した。

日本文学史における読者（昭和十三年度 石上順ノート6）

日本文学における読者（読む人）の問題を申す。それは、平安文学では当然読者を予期するものとみての文学が主なる位置を持つてゐた。それ以前は、たま／＼読者あつても多くは読者を予期せぬものなり。奈良、及びそれ以前のものさうだ。たま／＼読者あるといふことは、漢文学、又漢文学に仮名で書いたものは、読者を予期するやうになつてゐる。平安になると、反対に読者を予期する文学が、文学の主体になり、予期せない文学が□□□□□□（空白）つまり、所謂文学といふものは、文学でなくて文学である非文学が位置を下がつてきたのだ。だから、一番はつきり見えるのはこの時代で、民

謡、といふ非文学がいろ／＼に出来て来る。民謡がはつきりとしてきたといふことだ。で、つまり、目に訴へる文学が、たとへ少数でも、文学としての待遇を受けて良い位置についた。皆に読まれるやうになつた。たとへ少数でもといふのは、私の講義を聞いた人は疑問はないはずだが、昔風の説明の仕方では書かれた文学の外に文学はないと思へり。或は書かれてゐても偶然記録したり歌はれて来たのは文学とは考へなかつた。ところが、平安にはさういふ文学が少なくなつて書かれた文学が増えて来たものと、何となしにすべての人に予期されてきた。書かれた文学が、非常に多く、書かれない文学が少い。素朴な考へを持つ人は、書かれた文学の時代だといふ。それで、一寸ことわりをつけると、やはり平安になつても文学の種類によつ

ては書かれない非文学に属するのが多かつたが、その中書かれたものが出来て来て知識階級の内にもはやされるやうになると、それが純粹な文学なり。今日の標準からは、厳正に純粹とは言へぬが、さう言へる。書かれないのは文学以外のものを沢山含んでゐるといふことになる。で、ところが読者といふ問題になると、かなりのちの時代までわたつて考へなければならぬ。故に、いきおひ鎌倉・室町、それよりのちの江戸まで話がわたることになる。

一体、読者といふものはいつ頃から出来たか。われ／＼は文学が書かれれば読者が出来ると考へるが、その考へ方なら歌が歌はれれば、物語が語られれば聞いてゐる者あり。故に読者と同じだといへるか。文学が書かれたとて、読者があるとはいへぬ。それ位の読者は純粹な読者なり。今日の我々が文学雑誌を読む。さういふ読者なり。さういふ読者は作らない。作らない。この、作者としての立場を持たず、ただ読むだけの人は、なかなか日本の文学の上には早く現はれない。まあ、近頃の若い者は、あちこちふら／＼してゐるといふが、いろいろの原因あり。第一、遊戯と運動との区画付かず。野球から麻雀へ続けると区別はつかぬ。麻雀をしてもスポーツ精神でやつてゐるやうだ。(あまり)区画付かぬのを相伴すぎたのだ。だから、まあある所に区画を考へるよりしかたない。思想問題についても卒業したこともあらう。陰惨な思想問題を卒業したことになつた。それに代わるものは何もない。別にそれに關係ない人も同じことだから何

も考へない。も一つは知識が非常に劣つてゐるといふが、劣るはずだ。学生の読むのは好きな本でその中に一つか二つか読まぬ。貸本屋で借りてもたつた一つしか読まぬならもつたない。実に読まない。それが非常にあると思ふ。つまりジャーナリズム、書籍、出版会も乱雑になり、若い者に読み物を供給せぬ。どつち向いても若い者はのほほんといらぬことになる。年の行つた者が指導を誤つたのだ。若い人は現実を肯定し、今の自分の生活が一番良いとする。それが一番良いか。

そのやうに日本の文学は昔は読者を純粹な読者をもつてない。今の人には純粹な読者が多い。だから純粹な読者になるのがばか／＼しくなり、読者と作者とごちや／＼(一緒)になりたがる。売れもしない短歌・俳句の雑誌を沢山出し過ぎる。学者の足しにならぬことをしてゐる。ともかく、それが日本人の文学に対する特殊な態度だと考へられてゐる。けれども本当はまだ昔の物が残つてゐる。日本人は昔の生活態度をなか／＼改めない。人に作らして自分だけが読むといふことがじれつたい。ばか／＼しく歯がゆくてしやうがない。それで、実際においてはすでにほろびてゐる短歌類から繰りかへしてある。小説も同人雑誌を若い人が出すことになる。ところが昔の文学になると、ことに文学が初めて、主体となつた平安を見ると読者があるわけだ。書かれたのだから、書いて自分だけ喜ぶのでなく、自分の書いたのが活版になればうれしいから読むがそればかりでな

く読んでゐることは事実だ。しかしその読み方が違ふ。昔の人の読み方はすこぶる緩慢な読み方だ。我々は書物を写すのはとても耐へられぬことだ。楽しみ半分に読むやうなもの。文学は極くだけた、態度でいへばたいしてくだけたものだから、それを写すのは耐へられぬが、もう少し前になると木版ばかりに頼つた本は買つたら読める本も沢山写本を拵へてゐる。写本を作るのを楽しみである人が多かつた。写本が楽しみは根本は閑が多かつた。何も煩はされず物さへ書いておれば済んでゐる人が多かつたのだ。

平安の文学で見ると、勿論印刷されたものはない。皆書かれたものだ。それを読むはずの人はそれを写して行つた。副本を拵へる。その写すといふのが、我々は保存の為に写すが、昔の人は読むといふ意味が伴つてゐた。写すと、読むといふことがほとんど一続きだ。極端にいふと、読むために書き写さねばならなかつた。ならないといふと機械的になるが、どうも書き写さなければ読んだ気がしなかつたらうし、当然書かなければ読めないといふことだ。書くことと読むこととの間の關係を我々はこれから後も始終考へねば印刷の進まぬ時代の文学には見当違ひになる。いい文学だから書くといふことになる。今日、我々がわづかの古い写本を見るとこの文学がいいから写したと決めるが、実はさうじやない。つまらぬものでも読まうと思へば書くといふ態度を取らざるべからず。全く書くことの出來ぬ、ただ読むとか読んで聞かして貰ふ（この方が主）といふ階級

がも一つ下にある。第一の読者は書くのだ。第二の読者は読んで聞かして貰ふ。読者としてはだから書く人が進んだ読者だ。しかし、さういふ風な読書法は今日の頭にはどうしても入らぬ。書く間に何十倍か早く読めるので、それが昔は読む大半な方法だつた。だから、今日残つてゐる平安文学、或は擬平安文学(平安文学に擬したもの)、さういふ物はうんとある。さういふものが、皆いいわけではない。又、皆まともにいいものだから写したのではないのだ。どうもいろんな古い本を読んで見ると、写本を作つた人の頭に写本の字の間に批評の精神が宿つてゐる感じがしてゐる。始終批評してゐる。つまり、たとへば、その時代の人の知つてゐるものはすべて知つてゐなければその社会で、相当な位置の人とはいへぬ。昔は簡単に、歌だけとか長歌ながただけを憶えておれば良い。物語が出、日記と物語の間の物が出、さういふのがさういふ方法で読まれる。それを知らない人はその時の人として遅れてゐるわけだ。たとへば紫式部の書いた物語、日記、あるわけだ。それを清少納言なり、和泉式部なりが読まないことは我々より考へれば当たり前だ。ねたみあつて読まないことは当たり前だ(我々からいふと)。紫式部では女房の批評を女らしくしてゐる。とげ／＼しくやつてゐる。昔の人の常識に帰らねばならぬ。万葉集ならそれを歴史的に見る。又解釈するには、万葉時代の常識に帰らねばならぬ。今の時代の常識で判断するのは間違ひ。女はねたみさうだから読むはずがないと考へるは、我々の時代の常

識。昔の時代はそれが読まれなければならぬ。読まれてゐなければその人だけはその仲間に入らぬ。例へば紫式部の書いたもののお話が
出た時、清少、和泉が読んでないとしたらそれは一の恥なり。だから皆読む。読むのに皆、写してゐる。だから写本の初めから忠実に
写すのは疑問だ。その通り写すのは疑問だ。又、書かないこと、耳
に聞き心に覚えてゐることでも、あんな奴の歌なんか馬鹿らしいと思ふ。それを源氏物語の中に和泉式部の歌が引用してある。それは、
も一つ前の歌で、和泉のではないといふが、それは時代の考へた、
世間で騒がれてゐる歌は世間の知識なので、それを利用するのは当たり前だから、物語、日記、或は書かれた家集、さういふものでも
読む時に写すとすれば一々、自分のいいやうに曲げて行くのだ。大
体はそのまま写して行くが次第々々に形を変へる。元のものに深い
権威を感じた同時代の人、或は時代の遠くない人の作物を読むのだ
から権威を感じず、ここはかういふ風にしたらよい、この言葉の
かうしたら良いと手入れしてゐるから異本が出る。異本の少ないの
は、読まれた度数が少い。本は何部も伝はつてゐても字の使い方や
さういふ点に違ひのあるのを異本といふ。文章の表現に色々変化の
あるものを異本といふ。同じやうな種類の本いくらあつても異本で
はない。さういふ意味の異本の少いといふことは読まれなかつたといふ
ことだ。それから、も一つは非常に尊敬せられたといふことだ。残
念なことは、それほど尊敬された文学を見ることはできぬ。古今集

でもとんでもない異本あるから古今集の如く標準になつてゐるので
も早くより異本あり。万葉集なんかで行つても万葉集なんかは異本
を整理した、校合した本が伝はつたのだから割合にないが、万葉集
の中に含んでゐる中には異本が包含されてゐる。人麻呂の歌などは
万葉集自身が異本を包含してゐる。どうも、我々はさういふことは
歌の場合は歌ひ違ひ、記憶の違ひと説明したが、全体として見ると
読む時に加はつてくる批評が文章を動かさしめるのだと考へなければ
ならぬ。だから文章は変化して行く。部分的なことはかういふ風な
書き方にしたらよいと部分的な変化あり。大きなものになるとパラ
グラフが変はり、段が変はる。これではもの足りぬからかういふ所
を少しそろへなければいけぬといふ風にして書いて読んでゐると自
分が初めて作つた人と同格みたいになる。するとその時代は読者だ
が、我々よりいふと読者ではない。日本文学史上の読者の一の態度
だが、それは第二次、第三次以下の作者なのだ、結局は。
で、ところが、も一つそれと対して考へられるのはただ聞いてゐる
だけの読者だ。つまりこれがいゆる童蒙の読み物だ。童蒙といふ
読者層だ。さういふものには読んで聞かせるよりしかたない。する
と、つまり、聞きながら、腹へ入れて来る。これには、批評精神が
はたらかない。つまりさういふ風に読まれるのは立派なものと思ひ
聞いてゐるので、批評精神がはたらかず、又はたらいとところで、
文章を変へるわけにはいかぬ。我々よりいへば読者といへぬ。読者

とあきめくらの読者と二つがある。それがずうつと並んで来た。後々まで、文学を読むのはそのどつちかの態度により読んでゐる。或はその二つの態度を混淆さして読んでゐる。だから、時代が変はつて来て知識を持つた人が増えてくる。有識階級が増えてくるとつまり第二次、第三次の読者が増えてくる。即、書く読者が増えてくる。ただ読んで聞かして貰ふ読者はそれに対し、非常に低く見えてくる。読んで聞かして貰ふ態度の読者といふものは、つまり人口は昔より増えてきてゐるに違ひない。減るわけはない。ただ比較すると、有識階級が増えると、童蒙の読者が非常に低く見えて来る。ところが時代が変化して来て、鎌倉の声を聞き出すと段々書物といふものを皆見て来る。印刷された外国の書を見たり、書き替へられない書物、手を入れることの出来ぬ書物にあつて来る。だから書物の権威が増して来るわけだ。つまり何も書物の内容が優れて来たのでなく、有識階級の書物に対する態度が高まつて来る。つまり作者階級の男が専ら作者になり、それらの人が支那の書物、文献を読む。するとどうしても手をつけられないのがあると思ふ。今度は他の人の書いたのを見ると、その考へがうつる。書物のみだりに変へない習慣が新しく起こる。つまりこれまでの人は、云ひ方を変へて云ふと昔の大昔の語部といふ者が語り伝へた物語、その物語が長く厳肅に形の変はらぬやうに守られてもそれが次第々々に形が変化する。その昔の語部の物語と今のそれと形が違ふと気がつく、皆語り伝へ方

に自由を欲して来る。だから、語り物の変はつて来る。これと同じで、書かれた文章でも語部と同じ事変へる。ところがさういふことをすっかり離れて語部を思つても見ない時代になると、態度が違つて来る。たとへどんな本でも書かれた書物をば書き換へるといふことが少なくなつてくる。

ところが書かれた文学がその時代になるとそろ／＼自由に聞く文学の領分に入つて来る。つまり第二の読者、聞いて知るといふ読者のための書物になつてくる。それは少し云ひ方が悪い。昔は童蒙といつても、本を読んで聞かしてもらふ童蒙少かつたが鎌倉あたりになると本を読んで聞かしてもらふ者多くなる。諸国の武家が京都風の生活を学ぶから男は連歌だとか本から作るやうになる。子女は童蒙の読み物を読んで聞かしてもらふことになる。今まで読んで聞かしてもらはなかつた人たちにも書物が読んで聞かされるやうになる。すると、なか／＼一通りではわからぬ、読んだ文句だけではわからぬから書いた巻物を見せて、絵の説明をして絵解きといふことをする。巻物の中の絵を説く。つまり絵巻物とか絵詞が文章と絵になり、絵を見せつつ、文学を読ませることになる。読者に与へる読み物といふものは、それで低い読者には聞いただけではまだわからないところのあるおそれをもつてゐるので絵解きが起こる。一度さういふ方法が起こると段々さういふ方法が世間に出るから行者が宗教を説くには絵巻物を持ち、布教して歩き、絵解きをする人の沢山集まり、

法事の場所に行き、絵巻物を広げて節面白く読み上げ、目と耳と両方よりわからせるやうにする。

かういふ風な態度で進んで来たから我々の近世の読み物といふものは、非常に程度の低いもの。つまりその代表的なのは御伽草子の古いもの。御伽の中には古いものとかなり新しいものあり。御伽草子を見ると、これ読むべきものではない。我々には御伽草子に使つてゐる言葉が長所がわからぬから読み物としての価値を考へるが、本当は読む程の値打ちのないものだ。御伽草子はやはり童蒙の為の読んで聞かすものであり、それから童蒙時代を通り越した人が今度は自分で読む物となつた。だから、若い時は人から本を読んで聞かして教育されるが年が行くと、自分で勝手に読み、教育する。御伽草子の新しいのは江戸の初めまでもずうつとまたがつてゐる。それが江戸の仮名草子読者へ一方行くのだ。仮名草子だけでは仮名草子は読みやすいが、それでも童蒙には読みにくいからもつと低いものがだん／＼出てくる。いはゆる草双紙などがそれだ。種類は読本に耐へられない人達のものだ。この草双紙なんかでも童蒙の読み物には耐へられぬ。仮名ばかりで絵が入つても童蒙には読めぬ。相当な年になり初めて読める。その草双紙の中に一番文学史の中で早く出来たのは江戸の中でもかなり遅れるがその中でも赤本・黒本とかいふ子供に読ませる御伽噺のやうなものだ。黒本の方が付録。黒本を癩瘡の子供、癩瘡に襲はれないやうに、子に読ませるのが赤本。子供

は絵だけ見てわかるが、やはり大人が読んで聞かせた。その中に子供時代に読んだ読み物をいつまでも読んでゐる。だからやはり幼い時より読み付けた読み物はいつまでも読まれる。さういふ形で進んだものが黄表紙。黄表紙は最初は内容は御伽噺。御伽噺の中に大人の気分を思つて御伽世界に入つた。だから皮肉なへんてこなものになる。子供の世界に仮託したところの子供といふ響をかぶつた皮肉な世界みたいのがそこに出てくる。それは男の読み物だ。女相手の読み物は、自分たちの子どもの時代に読んだのと同じやうなものでそれより進んだものを読みたいといふので、草双紙の合巻（ごーかん。合冊の草双紙）が出る。初めは、一冊だが一冊ではつまらぬから三冊になり、散らばるといけぬから合巻になる。女はいつまでたつても草双紙の合巻ばかり。江戸の末まで明治になつても読んでゐるので、片一方の読本の系統、草双紙にまかりにせなかつた。それが自慢好きな読者を見出すやうになる。つまり仮名草子は次第々々にむつかしくなる。漢字を次第々々に加へ、絵の数を減らす、といふ風にして草双紙と読本の隔たりが出てくる。これに対しては読者がはつきりと出てくる。読本を読んだ読者は知識階級なり。今日いふ我々は読本だつてつまらぬが、草双紙と比べると違ふ訣だ。その場合の読本といふのだけは自分で読む本で草双紙は人に読んでもらひ、草双紙は御伽草子に変はつた。童蒙のそばに来て御伽をしてゐた人が読んで聞かせたといふのが御伽草子。故に仮名ばかりになつ

でもそれは読本ではない。

さういふ風になつて読者がはつきり決まり、理由ももつと大きな理由あり。江戸になり、木版の出版術が非常に大きくなり、幕府、諸藩の藩校の守護でさうなる。すると出版術、印刷されたものはつまり作者と読者ははつきり明らかにわけ区画する。本を間において読者はこつちの側、作者は向うの側にあることになる。故に日本の文学史における読者の歴史は江戸時代は非常に飛躍した時代だが江戸において印刷が進歩したに拘らず草双紙の世界は昔のやうに読んでもらひ、年をとつてからぼち／＼自分で読み出す態度が行はれた。ところが読者が読者であるためには、批評といふことがやはり加はらねばならぬ。批評のある読者、ない読者とが出来る。次は批評の歴史より本論に入つた方が都合がよい。(九月二十二日)

日本文学史における批評(同前)

読者といふことを扱つた文学史はないから考へてもらはざるべからず。読む人なくて文学はないわけだ。この間は、読者に批評が出て来る。批評問題が話に残つたと思ふ。で、日本の文学史に批評精神の出て来ることは何と申しても、正確には歌合せから論じなければならぬ。もつとも支那の文学には早くより批評發達してそれ支那文学が日本に入つて来て批評しないまでも日本人が作つた時にそれに対し指導者が若干の添削やら批評を加へないことはないからさうい

ふことは早くよりあつたにちがひない。けれどもさういふものをまづ取り除いて、さういふものは、批評精神をだん／＼育てて来るが、単に日本的なものを考へてくると歌合せを一番先に申さざるべからず。日本の文学の一つの特質或は芸術といつてもよからうが芸術には少し変化あらう。

文学においては、いつまでも変化をさせないで、もとの形を保つて行かうといふ力が働いて来たやうに見える。結局、かなり長いいろんな時代にわたつて文学の形式の変化がないといふことだ。批評もそれで歌合せの批評ははじめの状態はほんとはわからぬがだん／＼書物に載つてゐる歌合せが批評を含んでくる。歌合せに判のことは(判詞)がついてゐるものがだん／＼出て来る。次第／＼に判の詞に特殊な用語が出来たり非常な行き届いた鑑賞眼のうかがわれるものあつたり、非常な辛辣な批評あつたりして時のすすみを感じさせるが大体においてまあ歌合せは形に変化しない。歌合せの批評には変化ない。よくも変化なしに引き続いてきたと思はれるほどだ。変化すると今度は違つたものになつてくる訣だ、日本の文学と云ふ物は。で、只今残つてゐる歌合せは、在民部卿家の歌合せ(在原行平家の歌合せ)、それから寛平の歌合せ、それから、七条の后宮の歌合せ。これらのものは歌合せで古いものなり。しかし、在民部卿家の歌合せ以前に歌合せがないといふやうな大胆なことはいへぬ。只今においてはよほど大胆な文献主義、非常に頑固な文献主義の外は在

民部卿家以前に歌合せなかつたとはいはぬ。つまり歌合せの文献がないといふだけであつたにちがひない。書かれた歌合せの前にも書かれない歌合せが我々にはもう既に証明済みだ。書かれない歌合せは宮廷の儀式としては後世まで御歌会おんがかいになり残つてゐる。さういふ特殊な形もあるが大体において、歌垣類似のものだ。それがその前に来る。それで、歌垣があつてそれが分化していろんなものに変はつて行く。その一番文学的に進んだのが歌合せ。その中に口の上の歌合せ、それより書かれた歌合せに進んだ。歌合せの古いものになると判の詞がついてないからといつて判者が判をしなかつた、判者が批評をしなかつたとは申されぬ。

つまり批評を書かなかつただけだ。書き残さなかつた。後にだん／＼批評を書き残すやうになる。故に同じ時代にも判の詞ついたのとつかないのと両方ある。で、判の詞も判者だけでなしにその他の人がたくさん判をしてゐる。判者以外に判者とほとんど同列の読師とくし・講師こうしがあるから、それが読んだり講じたりする以外に判に關係してゐたやうだ。それから更に双方から議論する。右方左方と両方が銘々に議論するやうにもなつて来る。ただ、我々に問題になるのは果して昔の歌合せの古い時代、口でしてきた歌合せ、或はも一つ前の歌垣なんて云ふ時代。歌垣は、同時を主にして□□□□おもふ普通は見るが、雑魚寝を歌垣は条件的にともなはなかつたらうが、多くは伴つた男女がよく両方に分かれ歌のかけあひをする。歌

垣はかけるの性質上、又動詞の性質上より歌をかけるといふことにちがひない。歌の垣根といふことは文字にさう書くだけだ。さういふ古い時代に果して審判者がゐてどつちらが勝つたといふ判断したかといふことは問題なり。ともかくそんなものありてもなくても歌を歌ひ出した瞬間、歌ひ終はつた瞬間にそこに対してゐる人たちの間におのづからどつちが勝つたといふ判断できたにちがひない。これは駄目だ、やられてしまつたこつちが勝つたといふ風に判断できたらう。Aの左側の男の選手に対し右の女の選手が答へる。その瞬間に女が非常にきちんとした男の歌をひつくり返すやうな歌を詠んだとするといづれなしにその場ですぐに皆認めてしまつたにちがひない。それは、ほとんど事実だらう。ところがだん／＼進むとどつちがいいかわからないといふことになる。だからそこで判者といふものが必要になつてくる。だから、つまり歌合せの古いものは全く運動しないsongなり。だが、これが私らの考へるところではさういふ選手が少なかつたのだ。それがだん／＼選手が増えてこも／＼両方より掛け合ふやうな状態になる。どうしても歌垣より歌合せができてこなければならなかつたのだらう。さう無茶苦茶に歌垣で掛けたのでなく、これなら大丈夫といふ代表者が出てそれにより勝ち負けが決まつた。勝ち負けは一種の占ひだ。負け方がつまり今年、不幸で、勝ち方が幸福だ。農村で云ふと勝つた方が豊作、負けたのが凶作だと云ふ事になる。だから代表者であつたらう。だん／＼練

習が積まれると選手がだん／＼出てくる。すると判断する人がやはり必要になつてくる。全体に通じての審判者が必要になつてくる。細かいことはわからぬが例へば、たつた一例万葉にはつきり残つてゐる。それから凡そそれと同時に日本紀の天武天皇の御代には二回書いてあるが、天子様の前で無端辭しはしなきこと―の掛け合ひあり。万葉卷十六意味のない歌。我妹子の額に生ふる……、我背子のたぶさに……。意味のない歌のやうにも想像されるが、天子の前で群臣がはしなきことの競争し、勝つた者に掛け物を与へた、といふことが天武天皇の御代に二度ある。万葉集の方はごく平凡なことで卷一にある額田王の長歌、これを見ると、ほんの一口申すと、天智の御代に（も一つ前の御代）中臣の鎌足に仰せられて、春と秋と群臣をしてその優劣をば争はしめられた。その時に額田の女王が歌を以て判じた歌と書いてある。「以歌判之歌」とあつて、後にずつと長歌がある。その歌を以て春がいいか秋がいいかの判断をせり。判といふことあれば、額田の女王がどつちかの味方になり、秋方、春方になり、私は春は不賛成、秋の方が賛成で（秋方になつた）あるといつただけで判詞と書かぬ。尤も万葉集の時分には判といふこととはつきりと使つてゐなかつたかもしれないが大体、平安の初めまでのほれる。用例で見ると判は自分の思ひを述べたといふことでなく、勝負の決裁をした。どつちがいいといふことを決めたことだ。額田が少とも判者だつた。沢山の人の意見があつたが、どちらも言

ひ分はもちろんだがやはりどうも秋の方がよいといふ言ひ方をしてゐる。要領を得た人でなければ片一方立てておいて、も一つの方を勝たせるといふ風にしてゐる。もちろんさうしなければ判者の名にはないが、額田は春の山はいいが、しかし、なんほいいといつたつて入つて行くのは億劫だから入つて行かずに済みます。秋の山は辛抱できないで入つて行つて折る。折らないでも一つ黄葉したらよいと折らないまでも黄葉してよいと春の方を立て、だから私は秋山ですと。だからまずのち／＼の考へ方よりいふと額田の歌はかう書いてあるのだから判の詞だ（ことばがき）。判者の判の詞が歌を以てせられたといふことができる。それなら鎌足は何か。天子の命令をうけて何も鎌足が判者といふことではない。天子の命令を傳達するは宮廷では非常に重大だから伝達者の名前は書くべきだ。歌のためではない。歌の重しのために書いてゐる。おそらく春秋の物争ひの今残つてゐる一番古い歌は額田の女王が秋方になつて作つたのである、春秋の物争ひの判者になり、判の詞として云つたのだと思はれる。するとその考へ方は、私は筋が通つてゐると思ふが、はじめより信ぜない人は私の論理を信ぜないだらう。額田が一人だけ秋山がいいといふたに過ぎぬといへばそれまでだ。ものは筋が立てなければならぬ。筋立てたのを常識でこはすな。さういふのがひよつこり万葉集に残り、その後ずつと見えぬ。で、平安になりほつ／＼見えて来る。それから平安の末頃よりだん／＼發達して、鎌倉へかけて

非常に發達してくる。だから日本の歌といふ唯一の古い時代の文学、唯一の口承文学、歌をば唯一の口承文学と考へてきた。古い時代にはともかく歌に対しての批評は割り合ひ早く發達したのだ。

だから、古今、拾遺、後撰、後拾遺が出ると、名高い難後拾遺（後拾遺を非難したのが出た）。つまりこれは、歌合せの延長だ。歌合せにおいて練られた理論を延長して、書いたものに過ぎぬ。我々には難後拾遺集（だけだと）以後だと思ふがこんなものが突然として出るのは偶然だからそれまでの満ち引きに小さなものがすでにその前の三代集に対してもあつたかもしれない。ほち／＼さういふが書かれ、難後拾遺が出るやうになつてきた。我々は、文献について考証といふことは口承文学の便宜の土台だから輕んじてはいい学問はできぬが文献学は併ただ、考へなければならぬ。弱点はないものを考へることはできぬ。あるものばかり考へると我々に思ひかけないことがいつもある。歴代の勅撰集に思ひかけぬ異本あり。勅撰集がいけども／＼撰進されてゐる。さういふ経路が只今では皆消えてゐる。或は勅撰集であつて十冊のも二十冊の勅撰集もある。十冊の勅撰集は何々抄といふ名で総括すべきものだらうが、勅撰集の上にも集と抄とあるのを考へると只今残る文献よりは証明のつかぬことだ。抄の系統に属すべきものには金葉集、詞花集などあり。拾遺抄といふものは文献的に残つてゐる一番最初のものでその系統では抄とはいはないが、金葉・詞花集だ。新古今集では、隱岐本は一番

最後に後鳥羽院が新古今の定本といふべき隱岐本の新古今、隱岐の島で決定された隱岐本は新古今和歌抄だ。これ二十巻だが抄と書いてある。つまりさういふ集と抄との歴史だつて只今だけの文献だけでは割り出せぬ問題残つてゐる。歌集だけについても古いものが一部出て来ることにいろんなかはつた今までわからなかつたことが出るにちがひない。さういふことが、予期出来るやうな不思議なことがあり。だから、今ある形といふものが、もとの形でなければ今ある形が最も正しい形だと信じてゐることはまあ用心した方がよい。それで、歌合せなんていふものがだん／＼進んできて、批評といふことが進んでくる。もちろん批評の進むのは一面には、詩体論（詩の形）が奈良朝にすでに盛んに行はれてゐるからそれが平安にもちこしてゐる。詩の形すがた、詩体論より發達してゐる。育つてゐる。いくらか学問的な傾向を持つたのは歌の形を感じ、それから内容に進んだ。勿論、詩学の影響は非常にうけてゐるが、日本的に進んだ道も考へねばならぬ。併、よく我々が思つて見ると、歌合せの書き物がいかに文学評論を含んでゐてもそれは殆ど当事者の内だけの評論だ。批評家と作者ばかりなのだ。時としては作者ばかりが批評してゐる時あり。つまり読者抜きなのだ。はじめから書かれた時には何も読者はない。作者と批評家だけの間につきまり問題が横たはつてゐただけだ。問題が解決され或は論じられただけだ。

だからどうしても本当に読む人といふものは、どうして出てくるか

といふことは、その方面では、大部後のちにならなければ出ぬ。歌合せを読みそれを参考に自分で歌を作ることにならねば出てこない。そんな点よりいふと、単なる童蒙、無知で経験の少ない童蒙といふやうな者はただうけるだけだ。自分の意見をちつとも出さない。近代では、昔話を聴く童蒙が、話に参加する。つまり昔話をすると子供が間の手を入れてはやす。それで話が円滑に進む。急所急所に子供がはやすがもとの形ではない。なぜならばやされる所は、話の調子づいて面白いところだ。童蒙達が喜んでそこにいるのを待ちうけてからかうする。説話者に声を合はせる。つまり説話者の記憶の一部分をば、聴いてゐる者の方でも記憶するやうになりはじまつてくる。聴くだけのものだ。関係しないで聴いてゐるだけだ。だからこれが書かれない言語で語られてゐる。だん／＼律の要素が少くなつた。散文詩に近いもの（近頃では散文詩などはやつてゐるからわかるが散文詩に近いもの）。さういふものになつてもともかく、書かれてなければ聞いてゐる人は聞いてゐるに過ぎぬが、これが例へ幼稚なありさまでも書かれた場合には一種の読者になる。その読者にはこの間一寸話したが読者には自分で読む自分よがりの読者と、自分が読めぬから人をして読ませる読者となる。読んでもらふとただ聞いてゐることとはちがふ。巻物に書いたものを読んでもらひ聞いてゐる。だから少くとも絵だけなど読んでゐる。それで読んでもらふ形がだん／＼出来てくる。で、その状態から更に進んで、

純然たる読者が出てくる。読んでもらつてゐた者が今度は自分で読む。これも字が読めたから必しも自分ですぐ読むのではない。ある年令まで読んでもらはねばならぬ時あり。書いた物、重大なことあればそのものが勝手にすべきものでなく読んでもらひ節について行く。節を自分の体に取り込むと昔に読み方を覚えて行くといふ風にしてそれである時期に達し、ほんとに自分自身で読むやうになる。ほんとの読書は、なか／＼さう単純なものではないのだらう。これを、歌で申したから歌で云ふと歌の場合はつまり、古くより、浅香山影さへ見ゆる―、冬籠もり……難波津の歌、さういふ歌をば皆、手習ひしてゐる。そんな歌を手習ひしてゐる習慣は平安時分より手習ひしてごく近代まで浅香山、難波津を習ふ。それ以外に習ふものが増えて来ただけだ。浅香山だけでなく、天地月星など和製の千字文みたいなものをばやはり手習ひの過程に加へてくる。つまり最初にそんな短い覚えたらしまひのことだがやはり、覚えるといふことだ。書くといふことと読むといふことが始終一つなのだ。或一面より見ると読んでゐる。浅香山影さへ……と読んでゐる。難波津……と読んでゐる。或一面より見ると字を書いてゐる、手習ひしてゐる。だが、同時にそれが心の中へ、深く入りこんで落ち着けられる。つまり記憶される。で、完全な知識になる。知識の習得を始終繰返してゐる。そんなことをしてゐて次第に手習ひの手段による読書の対象といふものが進んでくる。つまり沢山な巻物やら冊子

をば読む。つまり書くのだ。同時に覚える。

さういふ風にして本を読むといふことがいつまでも続いて行つてを
つた。ところがだん／＼世中が社会状態移り時が経つほど形式が固
定してしまふから、読むといふことと、書くといふことと、それか
ら覚えるといふことと、皆別々になつてしまふ。つまり読むなら読
むといふことが固定し書くなら書くことが一のはつきりした目的を
持つ。覚えるなら覚えるといふことが今までと違つた意味を考へら
れてくる。が、ある点では昔ながら。

で、日本の文学の上には我々からいへば等しく文学だが昔の人のい
つてゐた文学とその以外のものと二つあり。その片一方にはだん
／＼だん／＼批評が進んでくるが、片一方はいつまで経つても批評
が行はれないで来た。だから、歌なんかはだん／＼批評激しくなる。
歌について連歌が分裂してくる（これは語弊がある。歌が発達する
過程において歌と同じ方面に向いてゐるものが連歌となる）。連歌
にも歌と同じやうに批評が発達してくる。今度は連歌になると、批
評の外に一の理想を持ちはじめ。歌にもすでに現れてゐるが、連
歌が仏教の盛んだつた時分、理論仏教の盛んになつた時分連歌が榮
へたからだ。連歌が一種の理想。批評と同時に批評の到りつくす理
想を持つてくる。歌には歌の理想はない。歌合せの批評を見ると理
想はない。連歌にはどういふところと、行き着くところを考へてく
る。それが今度は俳諧の方に入る。連歌が着物を着替へて俳諧の方

に伝はつて来るのだ。併、さういふ批評を持つたものが日本では昔
より文学と扱はれて来た。だからその系統にあるものがだん／＼世
の中より文学と次第に認められてくる。ところがいつまで経つても
文学と認められないもの、批評を持たぬものだ。つまり読者はある
が常に批評をしない。片一方は批評があつて読者がいない。それが
近代には文学とし、読者ありて批評なきは文学でなかつた。その時
代の人が文学でないと思つてゐないのが後の時代より見て文学であ
るは不思議はない。後の時代においては過去の文学、非文学を通じ
て文学的なものをば、もつてゐるかどうかをだん／＼発見してくる
からだ。併その時代には文学でないものがあつた。江戸の末まで
も。故に我々今日主として文学とするもの、歌、連歌俳諧以外のも
の、主として文学と考へる。散文は文学とだれも思つてなかつた。
ただその中に自分で文学と思ふが世間では文学扱ひせず翰墨するや
うな態度で自分のことを戯作者といふ名で呼んだ一群がある。戯作
者といふものは、読本作者階級が中心。それから扱つてくるが。こ
れらのものは現に支那の文学を読み、支那の文学の素材、テーマを
日本の文学の中に入れてゐるが支那の文学であるが日本の文学で
はない。それを文学と主張するだけの勇氣もなかつた。それを主張
すれば同時に読者なくなるのだ。自分だけの楽しみなのだ。そんな
意味でさういふものが文学でありたければ初期の洒落本、洒落本
の古いものみだといふ銘々お互ひに学問ある漢学者連中が自分

達のお互ひに読みごく狭い範囲で自分らの不良行為を暴露して喜んでゐることを書き、喜んでゐる。それが洒落本の初期で、そんなものに留つてしまふ。読者を持たうとする各時代の文学の標準にはのらなくなる。で、到頭、江戸の終ひまで、散文学といふものは文学扱ひをまあほとんど享けなかつた。つまり童蒙の読み物、或は士君子の隠れて読むもの、子供の時に読んだからやはり愛読を続けてゐるといふやうなものになる。さういふ風になる。つまりさういふ風に二つの流れがずつと来てゐる。故に日本の文学の上で読者をもつといふことを嚴重に申すと読者層のあるものは読者層をもつてゐればもつてゐるほど非文学だ。当然読者層は童蒙階級、子供或は無知の人達なのだ。士君子といふものは文学の読者ではない。そんなら漢文学は日本人はごく近代まで文学として一度も扱つたことはない。内容が難文学でも皆一の学問として扱つた。その学問の中より不良な漢学書生の中より、禁断の木の実を探し出してきて楽しんでに過ぎぬ。近代の^(キ)□□□□^明あたりの本棚の中より猥雑のものを探し出した。それ以前のものになると今日我々が文学として十分扱つてよいのも学問と扱ふ。今でも漢学者自身も文学と扱ふべきものを文学と扱つてないもの沢山ある。つまり読者の層といふものは常に動かない。―語弊あり―ともかく、年令で決まつてゐるのだから、いつでもある年令の間は読者だ。童蒙といふ時期は常に読者なり。その時期を脱すると今度は作者になつてしまふ。併乍、その読者にな

らない形、作者にも読者にもならぬ形あり。それこそ無知蒙昧な、昔のことで頑民^が―何も世中の文化と關係のない人達、つまり社会的に、文化の光に浴することのできぬやうな階級が下にゐてさういふ人達が常に文学に触れてゐない(どんな意味でも)併しそれらの物といふものが文学に似た印象をば常に与へてゐた。だからほんとに誰も文学といふものを読む、誰も彼も読者層になつたといふことは明治になつてからはじめてだ。江戸の社会生活を研究した人が江戸の町人はどうかといふが町人は都会の居住者ばかりだ。町人は位置低くとも特殊で文化の光を浴せる。田舎にゐるのは町人とほとんど同じ位置にゐる者でも文化にあたることはできぬ。田舎では町人より幾分位置が高くないと文学にふれることはできなかつた。それでも、つまりだんく町人の階級が文学に触れてきたといふことは読者層が広がつたことにならう。それは凡そ戦国時代の末より江戸時代を通じてと見てよい。常にしかし我々の国では土ばかり掘つて、ほんとに蛙の親類みたいに生活して文学も何も知らずに過ぎたものあり。それらのものには寺の説経とか民謡か、或は宗教的な語り物といふやうなものが文学的な多少な影響を多少残して通り過ぎるに過ぎなかつた。(九月二十九日)

日本文学 平安一（昭和十一〜十四年 石上順ノート2）

文学史のどの時代をするといふことは決めましたが、去年は奈良朝の風土記まで位行つた。今年は平安をするか、日本文学の発生時代をしようかと思つてゐるのだがどちらをしようか。平安朝。

日本文学史の仕事 文学史について、毎年話すことだが、文学史といふものは何の為にするんだ。実は何の為にするんだといふ程度空虚のためにするのでない。したいからするんだ。心の中にある事実なのだ。

文学史はどういふ仕事をするのかと云ひかへた方が本當なり。で、われ／＼の場合には日本文学史と申し上げる。国文学史といはぬのは、国文学の歴史といふことは二通りの意味あり。日本文学の歴史といふ単純な意味。われ／＼のしてゐる国文学の歴史といふ意味にとられる怖れあり。そんなにとる馬鹿もないだらうが、さうまちははれぬ先に云つておく必要あり。それは日本文学史をとにかく研究する。外国の文学史を研究するだけの視野が広くなればすることも亦あるだらうが、当分ない。日本人の多くはそれなり。どうしても自国の文学に認識を深めて行くことが本當のとるべき道なり。だけれどもその意味において外国の文学史を研究するのと同じ態度の人あり。外国の文学を研究し指導する人は外国の文学の案内者を以て満足する人あり。日本文学にもさういふ人どうかするとあり。日本

文学の案内として日本の文学をするのだといふ風に文学史を功利的に考へる人あり。それはまちがひ。さういふ目的にもかなふ方が正しいが、さういふ目的で満足するのが正しいか、それは本当の目的ならず。われ／＼が日本文学史上の起つてきた種々の事件とか現状をばこと細やかに掲げ出す、暴き出すといふこと、われ／＼の文学史の仕事ではない。もししことばよりいへば、非常に不利益に思はれ、或は非科学的な感じを持たれるかもしれないが、もしし実感的な要素を持つのが本當なり。誰でも研究出来る国文学史を同じやうにやるといふのではなしに、結局研究する人はその人の素質に添うて国文学をば系統属を見る。だから、その人の研究がなければさういふ系統属があるなり、ないかもしれないといふ風な研究が本當に入用だ。

案内記との違ひ つまりそこで案内記でない理由がわかる。それだけではひよつとすると納得が行かぬかも知れぬ。本當の世の中の歴史政治的の歴史その他の社会のあらゆる歴史を見ても歴史的な事件のそのとりかこんだもの、歴史的環境は誰でも同じやうに説明するものならず。その原因はかうだ結果はかうだと云ふ風なことをいふものと予期したらまちがひなり。それから史実の具備してゐる条件は人々により皆ちがふ。皆ちがふが結局一番学者らしい人、一番優れた人の説が正しいといふことになる。で、世間には文学史には案内記みたいなもの沢山あり。それは是非とも一度読んでいただく

ねばならぬ。必ず読んでもらひたい。少なくともかういふ講堂でやるのはそんなもの程度ではないけない。つまりあなたがたの日本文学史に対する歴史的の立場といふものを幾分でも指導して行く、幾分でも作つて差し上げるといふ考へでなければまぢがひだと思ふ。さうでなければ書物を使つて講義すればそれでいいわけなり。それで私が平安の文学史を講義すればありふれた仕方だが、私の平安朝の文学史になつて来る。それが多分たいしたまぢがひなしに組織せられてゐるだらうといふ考へで講義する。で、非常な荒筋を話からその内容を作る、或は態度方法に若干の誤まりあらば正し、深く入るがよい。

文学意識の發生 結局日本の国の文学を研究するので、文学史はそれを歴史的に研究する。われ／＼は文学史は固定したものを考へる。それ／＼源氏或は五山の坊さんの博学が頭に浮かぶけれどもそれより大事な事はどうしてそんな文学が出来たか、その文学が出来てそれはどういふ形でわれ／＼の生活に流れこんだかを考へるがもつと重要なり。だから結局日本文学といふものがどうして出来てきたか、それをどういふやうに次第々々に文学意識を生じてきたか。文学の種ができなければ文学意識は生ぜず種はできてもそれを文学は取り扱はねば意識を生ぜず。意識なければ種あつても論にならぬ。それ以上文学はたび／＼陶冶選択を受けねばならぬ。つまりいい文学になつてこなければならぬ。つまり文学における批評はどうして

出来てきたかといふことなり。さういふことを考へてくることつまり一貫した日本の文学史で一番大事。さういふ絶えざる考へ方の説の上に一の文学をおいて行く。源氏、五山文学、洒落本において見る。それをそれがどういふ姿をあらはすか、どうしてそんなものが出来てきたかを検査するのが文学史の一番大事な仕事なり。だが、実は一の文学を解く、その文学を文学性、それをできるだけ解体し、それからいろんな要素を□□□□さうとするは常にあやまり。全体にまとも(半行空欄)印象に引きづられながら文学を解体する、してから解体しても元の(一行半空欄)やはりごく平凡な歴史観の上に文学が發生してくる姿を見て行くといふ形において今申したやうなどうして日本人が文学を生み出したか、どうして文学といふものがこんなものだといふことに気がついたか、文学がよいものか愉快なものか、身にしむものかを感じ出したか。

徒然草がどうして出来てきたか。これは大事。徒然はひよつこり出来た。それに兼好がこれ／＼の修養を積んでゐるか。その素養からこれをくり出したといふだけでは我々の説明にならぬ。これは兼好に徒然をくつつけるのだ。世の中が徒然を生み出したとは解けぬ。徒然がどうして世に表はれて来たかといふことは倫理文学がこの世にどうしてあらはれたかといふのと同じ考へで考へて行ける。つまり文学の發生といふことを調べて行く。そして發生した文学がだん／＼進んで行く。進んで行く過程は個々の發生なり。いつまでも発

生を続けて行く。その続いて行く發生を展開と名づける。本式にいへば發生なり。展開でない。

文学の形式要素

それから一つ重大なことは文学の形式要素なり。文学が種々雑多な形式を銘々独占する。極端に行く。短歌は三十一文字、俳句は十七字の様式を持つ。何のためにあゝいふ形を持つやうになつてきたか。江戸時代になるとも一つ極端なり。極端にわれ／＼が読んで感じる形式だけでない。書物の版式にちやんと決まつた形式が出る。これは形式が更にいよく／＼外的化したものなり。

文学の形式要素を見ることが重大な文学史におけるわれ／＼のもつてゐるしゆうし（関心）（執心）なり。だから堂上文学、われ／＼が扱ふ文学は大きく見て二通りの態度が出てくる。純然たる文学ならびにまあほほ文学と取り扱はれるものを文学といふ。文学の基礎だけでもまだ文学化してないもので、人の注意をひく發表方法としては文字を主としてゐるといふ文学がある。表現法に区別あるとはいはれぬ。等しく言語なる故、發表の手段がちがふ。かういふ文学をば仮に非文学といふ名をつけてゐる。つまり非文学の方が文学よりは素朴なものを多くもち、文学はそれより進んでゐるが、始終、さういふ関係をつづける。非文学の方が文学より純文学的要素を多くもつ時代あり。これを更に事実についてもつとわかりやすくいふと、文学及び口誦文学といふ。文学は文学だがわれ／＼の考へる純文学の要素に欠ける。多くの人はそれらのものよりごく素朴でごく

直ぐな文学的な魂を引き出すを普通の文学に疲れた心の刺戟を求めること多し。で、口誦文学に興味を持つ人が非常に多い。民謡など。

民謡などは本当の文学でない。だから文学が本格的な文学と非文学と区別をはつきりさせる為に二つの区画といふものは大事なり。われ／＼皆民謡といふものを非常に好む。もつとひろげて短歌、俳句も好きだが短歌俳句も多少民謡的な要素で、これに文学的な興味を感じるのには実はまちがつてゐる。この文学史の講義が築ければこの二つの中より純文学的要素をはつきりしてきてゐると思ふ。民謡を純文学と思ふはあやまり。

口誦文学との関連

民謡を含む口誦文学は文学史の研究には重大な材料でもあり、重大な刺戟を与へてくれる。私の話は云つてゐること自身に矛盾があるやうだが、すると書かれた文学をかたく見てそれを取り扱ふと思ふだらうが非文学即ち口誦文学との関聯を始終考へながら説いて行く。国文学史上の口誦文学の位置といふことを明らかに出来ると思ふ。非文学の価値は文学史の上だけにだけある。文学として見ると文学史の上のみありて純文学の問題からいふと、この価値は低下してくる。だから文学としてと文学史としての立場をまちがへぬやうに気をつけよ。で、口誦文学といふ意味は柳田先生は口承文芸といふ字を使ひ、更に人によると口唱と書く。先にコーショアの文学が先に受け取られ、字が動揺してゐる。私は口で誦する文学の發達の形式を考へて口で唱へられてゐる形の変つて行く状

態を見たい。柳田は、今の世に現実に口で受け伝へられてゐる状態。これは現在を主としてゐるから私の方が文学史には少くともよいと思ふ。で、文学史をはじめのいろいろな態度をあまりやかましくいつてもしようがない。まあ初めから本当の話に入つた方が、あなた方に具体的なものを与へることができると思ふ。それ以上は理屈を述べないでおくなり。

平安朝文学を担う群団　で、平安朝の文学を考へますのにまづ一番何が主であるか。何を主として考へなければならぬかといふことは、平安朝の文学に限らないが、作物の一つの固まり、集団で考へるか、或は書物によつて考へるか、作者によつてか、いろんなことがあらうが、まづ一番文学の發生展開、發生と一番自然な關係をもつてゐるもの、文学を取り扱つてゐる人を問題にした方が一番良い。なぜなら人が文学をだん／＼受け伝へ育てて來てゐる、或は忘れ滅ぼして來てゐる。だから人を考へることは一番大事なり。ところが、日本の昔の世の中ではたつた一人の人を考へることは非常に難しい。必ず群団といふものを考へなければならぬ。それほど生活の基礎になつてゐる。で、つまり文学をば發生した時代からいろんな時代を通して、比較的近い奈良朝前後を経て、平安朝まで、もつて來た団体のうち最もわれ／＼の注意を引くのはどういふ団体かといふことなり。

平安朝の文学で一番氣のつくことは書き物が少ないにかかはらず

(それ以前の時代は) 宮廷以外の文学が相応に残つてゐる。ところが平安になると宮廷の文学が非常に有力になつて來る。地方或は他の群団の文学が陰を没す。あるにかかはらず陰を没する。いひかへれば宮廷が文学の中心に次第になつてくる。さういふ形が見えてくる。一口に云つてもわかる。奈良朝までは地方の文学が宮廷に集中し、集つてくる。平安は宮廷が文学が生み出してくる。どうしても宮廷文学が生れなければならぬやうになる。

女房階級と文学　さういふ宮廷においてどういふ群団の人が文学の上に最も仕事をしたか。だからたくさんさんの文学団体の代表者はなにか。宮廷に仕へてゐる女の人、これをば平安朝の生活が熟して來た時代のことばで云つた方が都合がよいから女房文学といふ。女房の階級が日本の文学をつかさどるなり。文学□□□□□(空欄)られることになつたわけなり。で、女房といふ階級は平安朝においてはつまり宮廷ならびに貴族の生活がある固定をもつてくるにしたがつて伴つてできてきたものなり。つまり宮廷ならびに貴族の家に信仰的に奉仕してゐる女官がたくさんゐた。その女官にいろんな階級あり。宮廷の貴族に寝起きして仕へてゐるもの。外より通つて仕へるものと二種類ある。さういふものがだん／＼時代が進むにつれて形を変へてくる。宮廷及び貴族の間における旧信仰が變化して行く。宮廷の神或は貴族の神といふものが、その神がその國を治めて行く原動力だつた。その神の話をすると長くなるからとめるが、神

に仕へるといふことが単なる儀礼にだん／＼なつて行つて、上から神に仕へる仕事がなくなる。まづ天子様が神に仕へる仕事より脱してくる。それから貴い人がだん／＼脱する。すると直接に神に仕へてゐた宮廷貴族の女達も上の者より神に仕へる仕事が減り、下の者がいつまでも神に仕へるといふことになる。だから平安のことばでいふと女房といふやうな高級な女官は割り合ひに神との関係は少くなり下級の女官にようかんといふ者がいつまでも神との関係は続く。神及び神に仕へると同じ形で天子様に仕へる。だん／＼神に仕へる形よりだん／＼上ほど離れてくる。離れて行けば今までの仕事なくなるから仕事がなくなくなるやうだが同時に今までやつてきた仕事が有力に意味を持つて来る。だから奈良の末より平安のはじめにかけて宮廷に仕へた高級の女官はまだ信仰的な仕事を沢山持つてゐた。それが時を経るに従ひ、だん／＼仕事がなくなくなり、今まで持つてゐた信仰と関係の薄い仕事に關係が深くなる。

小野小町を例に 例へば、小野小町といふ平安の初めの名高い女流歌人をあげると、桓武・平城では平安の生活ができてない。嵯峨あたりより平安らしい生活気分が出てくる。この時分からそろ／＼平安的な文学者が出てくる。平安朝の女文学者として一番初めにいはれるのは六歌仙の小野小町なり。この人に關する伝へも小野小町が本當に生きてゐた伝へはほとんどない。たゞ信用していいか、いけないかわからぬが、小町の作だと云はれる歌が相応な分量を残し、

勅撰集に載つてゐるからといふので信用されてゐる歌とか残つてゐる。それだけなり。ところが小町といふ人については、これからんでゐる伝へはよく／＼の後世的なものでない限りは小町だけではないに、平安の古い時代の女房の生活を示したものだといへる。どうも大和物語を見ると、小町は割り合ひに宮廷との關係が自由で、外より通つてきたといふ風に見える。併しそれより先づ小町はこの国から出たかといふことが第一に問題になるが、まあわれ／＼は近江か或は山城の境を接してゐるその辺に關係が深いのだらうが、陸奥むつの出羽いでの郡領と普通の伝へで云ふ。今では郡長より大きい。その小野の良実の娘だといふことになつてゐる。それが采女として京都に上つてきて京都に居着いたらしい。小町には小町の姉といふものあり（古今集にあり）。その姉の歌がある位なり。まあ平安の初め頃にはさう伝説化してはゐなかつたらう。その後、小町についてもいろ／＼の話あり。それはあてにならぬが、その話を考へて見れば、宮廷の女房といふものの起りが大体考へられる。宮廷に仕へてゐる高い位置にゐる巫女は次第に女房になつて行く。平安の女房の元祖とわれ／＼の知つてゐる知識ではいへるものが、小町なり。宮廷に上つてゐた順序からいふと宮廷の巫女として地方の豪族の娘が召された。つまり巫女の形で召された。昔から宮廷に屬してゐる国々の国主の娘が宮廷に召される。それで宮廷の神、天子に仕へるのが行はれてゐて、それが次第に郡領の娘が上り、采女になる。小町は

その形にはまつてゐる。小町自身がさうであつたかは問題だが、とにかく平安の初めの、女房がさういふものだつたといふことはこの話が暗示する。采女として京都に上り、宮廷に仕へ、京都に居着いた。それから私生活はわからぬ。あとは年寄り、容色が衰へて、乞食したり、行き倒れになつたとか、えろちつくな話があるが、あてにならぬ。

女房・女官　女房といふ者、大体、宮廷には神ごとにあづかる女多く、宮廷に仕へてゐる女はほとんど神に仕へる。皇后、齋宮それ以下の人達、女房、女官は皆巫女的なものなり。その中、女房は、大体どういふもんだつたかといふことがわかる。采女といふものは原則的なものは、男なら舎人なり。男の方がはつきりしてゐる。舎人は宮廷でいり用だけとり、後は豪族、貴族に分配せられる。女は、その手順がわからぬ。併し大体はそれに似た形があつたにちがひない。それで貴族の家に仕へてゐる女達も女房、女官といふ。貴族に仕へてゐる下級のを女官といふのはをかしいが、ともかく宮廷の称呼が貴族の上につつてゐるのは、同じものだといふことなり。それで、貴族の家庭のことを考へると面倒だから、宮廷のことで考へると、先づ采女のやうな位置の巫女が女房になつたのだ。ところが、宮廷に仕へてゐる巫女は、昔からさういふ風な本質的な話でなしに、巫女として巫女の職業をつかさどりながら仕へてゐるのを考へても種類が沢山ある。昔より宮廷と離れない関係で、宮廷の伝

へで神代より関係のあるものを飯に宮巫といふ。宮廷のある場所より上る者あり。これを大巫といふ。祝詞には大御巫といふ。かういふ者が居る。それから地方から来る采女。一々の職業によつて見れば細かになる(命婦、采女など)。性質よりかうわけて見る。一体その大御巫と采女といふものは根本の精神より云へば同じものなり。宮廷のある場所の神に仕へる巫女が宮廷の神に帰順したといふ形なり。巫女が自分の仕へる神をもつて宮廷に仕へる。宮廷のもつてゐる土地は平安時代は山城の国で、この国を中心として、宮廷の力が及んでゐる所は山城の国と同じで、どの国でも宮廷があると同じで、その国々に神に仕へてゐる娘、その国々の国主の娘が宮廷に上つて神に仕へるので、意味から云へば同じなり。ところがも一つさういふのと種類の違ふのが宮巫なり。宮に歴史的に宮廷に仕へてゐる巫女、さういふ人達があるわけなり。

猿女の君　で、日本の一番單純な昔の物語風に伝へたそれらの宮廷の団体を考へる。非常に数は少ない。まづさるめのきみ(猿女の君)といふ群団。これは古い伝へで、宮廷との関係の深いもの。その外に天より下つた群団は五つなり。(中臣の祖先、忌部の祖先、これは男なり。あとの三つの群団、猿女の君の祖先、これは女。あとの二つ、玉造の祖先のたまのをおやのみこと(玉祖命)、それから石凝姥命、これも名を見るとこの群団は女から形作られてゐる(どめ……女なり)。女が鏡造の仕事をしてゐた。おやといふことばはお

母さん、婆さんといふ意味に使ふので女なり。玉のお母さんの意味らしい。玉育てのお母さん。これも女らしい。すると五伴緒の神といふ日本の宮廷の御祖先につき、この土地に降つて来たといふ伝へのある五種類の神聖な職業の祖先は三つまで女なり。だからその子孫も祖先どほり女が主になつてゐたのにちがひない。ところが鏡造とか玉造は職業化したのが後には宮廷の關係薄くなり、猿女の君は鈿女の命の子孫と称する猿女の君が宮廷との關係を深める。併しこれらの職業の団体が五つなら五つの職業をそのまま保たずに、玉造が玉造と同じやうな職業を見出して分れて行く。猿女も分れてゐるんな群団が出来る。しかもつと考ふべきは猿女の君の祖先といつても祖先といふことは生みの系統の祖先といふことの他に職業の祖先といふことあり。で、伝統の正しい職業を継いであればその職業の祖先と同じ血筋と考へる。職業とその職業の血統とをだん／＼混乱して行く。五伴緒がおそらく八十伴緒やそとものをと分化し（数は何百かわからなくなる）それらの団体が必ずしも一子相伝といふことでなく、職業が同じだから、その職業の元祖の神様の祖先といふことになる。だから同じ職業だから一族（同じ血統、同じ祖先）と考へるのはまちがひ。

これは猿女の説明に役立つてくる。平安朝になつてから猿女の職業を継承したらしいものに稗田といふ家が出て来る。これは名高い藤原の都より奈良朝にかけて生きた稗田の阿礼の子孫のやうに思はれ

るが、その点はわからぬ。が、とにかくそれと非常に關係がある。稗田といふ家が平安になり出て、猿女と交渉が深い關係を見せてゐます。（五月十一日）

平安朝の女房の話　平安朝の女房の話をします。仕掛けをばあまり大きくやつたので、こゝらで少し縮め、簡単に参りませう。

平安朝になりますと、奈良が非常に奈良以前の宮廷のしきたりといふものが大変變つてくる。それにまう一つは世の中でも、だん／＼社会組織が變つてくる。一番目につくことは既に奈良あたりでもその様子は明らかに覚えてゐるが、われ／＼が普通に考へる神代以来と考へられてゐる世襲の仕事といふものの考へが變つてくる。つまり仕事をやつてゐるからして昔からの血筋が続いてゐるんだ、血筋だからその仕事をやるといふ考へでなく、仕事をやつてゐるからその血筋だといふ考へがだん／＼深くなつて行く。だから例へば、猿女の仕事をおそらく奈良以前に出てくる稗田阿礼の子孫と思はれる稗田の家の人が継ぐことになつても不思議はない。それを以て稗田といふ家の子孫は猿女の子孫だといふ論定は下されぬ。その考へはまちがへだから、猿女の仕事がだん／＼外の家に移つて行く。猿女の子孫があつてもだん／＼宮廷との關係がなくなつて行く。猿女の仕事のある部分まで稗田家の人が継いで行くといふと既に昔から伝はつてゐる考へ方なら稗田家が猿女の子孫といふことになるが、さ

うならず、職の伝統と血統とは別のものだといふ考へがだん／＼明らかになつてくる。併し乍ら例へば、猿女の仕事をするために宮廷より与へられてゐる報酬はそのまま受け継いで行く、といふやうなことになつてくる。つまり、経済的の事情は昔より与へられてゐる通りやつて行くが、血筋が絶える。血筋と職の筋とその他にその職によつて得る所の報酬との関係が平安時分になると考へ直さなければならなくなる。皆一つになつてない。つまり職をするためにその報酬をもらふといふことになる。それにも一つは職の考へといふものがだん／＼平安になつてかはつてくる姿はかういふところにも見られる。何のために藤原の氏の長者といふ権利があつちこつちの筋へ移つて行くか。同じ藤原氏といつても氏の長者の権利といふものは、必ずしも嫡流に伝はらず（嫡流といふと長子の家筋と思ふが家の権利をもつて行く伝統を嫡流といふ。だから逆になつて了ふ）。で、藤原氏の歴史を見ると政治上の混み行つた理由はいろ／＼あらうが、併し平安になつてから久しい間、政治上の力でばかり解決のつかぬ問題あつたにちがひない。例へばかういふことがある。その藤原氏の族長（氏の長者）権をもつものは藤原氏の氏神を祭る靈力をもつてゐる。だから、その靈力が一族を支配することになつてくる。で、既に奈良朝においても藤原氏のさういふ一族の組織、一族の中における組織を宮廷で認められ、氏の上、氏の助といふ名目が出来てゐる。まるで官吏と同じである。（丞があつたかも知れぬ）。

しかし、それほどはつきりしなかつたかも知れぬが、氏の上は必ずしも藤原に限らぬ。外の家にもあつたらう。藤原氏では、一番してゐることが目につき、藤原氏のことを書いた記録沢山あるので、目につくだけだ。藤原の氏の上になる人のしるしとなるものは三種の神器とは意味はちがふだらうが、三種の神器を解釈する助けになる。品物の性質がちがふが、つまり氏の上はお客を饗応する道具をば伝へる。つまり、朱器台盤が伝はる。朱器は盃（宮廷に朱器殿あり）、台盤はお膳のことなり。お膳といふと語弊あり。饗応に使ふ脚のついたお膳。盃とお膳とをば、つまり授与されるといふこと。も一つ重要なことはくさばかり（ホシクサ、チクサ、菊量）といふものをやはり受け伝へられる。で、記録に現はれるところを見るとこれで草をはかる所作もあつた。どんなはかりか今日ではわからぬ。すると今日ではわれ／＼が考へてゐる昔からの客人が来たときに宴会の形式が決まる。宴会にはお客に御馳走をする台盤がある。それから盃（もつと単純なものが先にあらう）、これは客が座敷に通つてから主座のまればとは馬に乗つてくるから馬ももてなさねばならぬ。で、くさはかりもある。この條件は馬をもてなし客をもてなす。これは、昔のあるじには必ずあるものなり。殊にこんなくさはかりといふかはつたものがある点において、おそらく藤原の氏の長者の伝へた朱器台盤、菊量といふものは氏の長者が宴会をするところのまればとを饗応する、あるじを行ふことのできる権力をもつてあ

るといふことなり。権利をもつてゐたことはさういふことをしなればならぬ。神に対して義務をおふてゐたことなり。神道の祭りといふものは今のやうなものではない（三方を運んでひつこめるのが祭りのやうな気がするのだが、あなるのも無理はないがあんな風でなく、やはりほんともてなす。すると、何かあとから〜靈力のある人が藤原氏のうちへ出てきて、藤原氏の本筋の家に出て来て、さういふ人に移つて行く。何を以て靈力を判断するかは神秘だからわからぬ。ところが藤原氏の場合はだん／＼氏名よりも家名をとへることになつた。氏名に対し家名は多くは地名、或は特別な事情で贈られた一つだけの名前、屋号の如し。とにかく昔はひつくるめて藤原と称したので、つかまへどころがないやうだが、例へば古いところへのほり、猿女の関係のあるわに（和邇）氏といふ家は早くより本筋が絶えてその他和邇のわかれる別々の家名を唱へてゐる。春日といふ家も、柿本の家（小さい）、小野なんていふ家も出てゐる。で、和邇の家の神は近江と山背の国境の辺にありき。その和邇の神を祭る権力といふものは時によつてちがふ。和邇氏が祭る時あり。春日氏が祭る時がある。平安になり、小野氏の氏より氏の上が出て小野氏の申請によつて和邇氏の祭りに小野その他の和邇氏の人は仕事を休み、近江の国の神を拝みに行くことを許して下さといふことになつてゐる。つまりそれを和邇といへば藤原と同じ。それがだん／＼小さな家名をとへるからちがふやうだが、藤

原と同じことなり。するとさういふ風に族長といふものが、親から子、子から孫とか、親から兄弟、親から兄弟それから子と伝はるだけなら問題ないが、突発的に外の流へ（同じ氏族であれば）うつつて行つたりする。ところが昔の神を祭るはたゞ神を祭るだけでなく、條件として神に何を以てどういふ職を以て仕へるかが一番問題だから、同時に神を祭る人は職を問にして神と接触する。いひかへれば神と関係深い職を家々でもつてゐることになる。族長の権利が家々でうつつて行くといふことは結局職の伝統が變つて行くことになる。低い階級ではその職がはつきりわかり、高い階級では職の種類がわからぬ。平安になると氏の上のやる職は何かほとんどわからぬ。われ／＼の時代の人にはせるとまつりごとが職と思ふが、さうでなく私は多少解釈を持つてゐるが申さぬ。

上の方ではその職が露骨にあらはれぬ。下の方ははつきりあらはれ、その職で他の人の保護をうけ、職が社会化してきて生活の元になつてくる。で、だから職のうつつたといふことはよく考へて見なければならぬ。例へば和邇氏の最後に名をあげたと云つてもいくらゐの小野氏と稗田氏の争ひをおこせり。つまりその間の消息ははつきりわからぬが、とにかく小野氏のをるところは猿女の職を保証するために与へてゐた猿女養田（やしなひ田）といふ職の爲の田。それと垣を接してゐたために小野氏がそれをば自分のものと冒認したわけなり。それで稗田の福貞子（員）といふ者が訴へた。ところが

その稗田といふものも果してどんな仕事をしてゐたかわからぬ。稗田の阿礼は福貞子（女）とは筋がずうつと通り女の伝統で女で宮廷に仕へたことはわかるが外の事は何もわからぬ。しかしわれ／＼がわかることは、猿女の血統でない職だけを継いだといふことはわかる。それなら猿女はどうしたといふことになる、猿女の仕事はいろ／＼あるやうだ。猿女の君の祖先の細女のした仕事を分解すると、つてゐて、道に立つてゐた人と問答した。だから猿女の仕事の中にはさういふ動機あるから外の人と問答する。素性のわからぬ外敵と問答する。これがあつたらう。平安になると猿女の君が門部と同じに宮廷の門を守つてゐたことが出てくる。更にそれと同じ職の伝統の稗田の阿礼のした仕事を逆にのぼして猿女の仕事の内容とすると猿女は語部の仕事をしてゐた。宮廷の物語を語る語部の仕事をしてゐたことになる。だからたつた一つの職ばかりやつてゐたと考へることもできぬ。さういふ女達が（多くは女）たくさんの男の伝統ある職を以て宮廷に仕へてゐるもの外にやはり宮廷に沢山仕へてゐた。猿女の外に一番著しく考へられるは平安になり、はつきりしてきたのはおほみかむこ（大巫）なり。山城の土地の神に仕へてゐる巫女なり。もつと適切にいふと宮廷の土地の神に仕へてゐる巫女なり。それがだん／＼意味が変化して宮廷の屋敷神、即ち八神殿の神様に仕へるといふ風になる。大巫の仕へる神は元來もとのちとで

はだん／＼變つて来てゐるんだらうと思はれる。猿女、大巫の外にいろんな巫女が仕へてゐる。その他に何かの意味に於いて宮廷の神と関係のある皆さんの女が仕へる。その女は宮廷の神と同時に天子にお仕へしてゐる。その天子は時あつて人間であり、時あつて神である。普通の昔の考へでは現実感と神秘感とが錯雜して神と天子とに分かちがなくなる。明らかに人だと思ひながら又どうかすれば神と思はずにはゐられぬ。神と人と天子の体はその資格が始終動いてゐる。だからさういふ尊い方をめぐつて巫女が沢山仕へてゐるとはあたりまへのことなり。ところがそれらの巫女が又何かの理由において、その起原を突き止めて行くと土地／＼に関係あるそれ／＼その巫女のおこる土地をもつてゐる。大巫は山城の宮廷がある場所の神なり。采女なんて種類は自分／＼の古い国（自分の）を背負つて山城の京にきて宮廷に仕へる。自分たちの土地の神を背負つてゐる地方の巫女が宮廷の神に仕へてゐた。で、すでに昨年の風土記のところで申し上げたやうに、この小地方の風土といふものは、宮廷の關係とは非常に昔は考へられる。天子に服従を誓ふ、忠誠を致すといふことの為には地方／＼の風土を明らかに宮廷に言上して知つていただいでおくといふ必要ありき。で、宮廷に仕へてゐる巫女達は例へば采女といつてもよいが、采女は自分／＼の国をもつてゐる。その采女たちが宮廷に仕へればその性質上、土地の風土と關係した仕事をば宮廷で行つてゐるにちがひない。一番その仕事で考へ

やすい仕事は自分らの生れて自分らが仕へて来た神のをる土地の歌だとか、ことわざだとか、さういふものをば宮廷に持ちこんできて宮廷のものとするといふ仕事を持つてきたらうといふことは大体察せられる。個々の遠いところにあるものでも宮廷にをれば自分等の歌をうたつてゐるのだから、自分らのするまつるその形式は（一行半空欄）宮廷の祭りの形式を習得して国に帰るのが、原則だつたらう。だからたとへば記紀の雄略の時に出てゐる三重の采女、或は奥州あさかの采女（万葉）、安積采女、なんかのしてゐることを見てもみなその国々の国ぶりをば宮廷で行つてゐた。その行つたことゝ形が幾分変化して伝つたといふ風に解釈できる。雄略が新嘗をきこしめしてゐる時に采女がさ、げて行つた（頭に高く捧げてゐたので盃に葉が落ちたのを知らなかつた）。雄略怒ると、采女歌を捧げた。その歌は怒りを鎮めるために、鎮魂の歌なり。これは三重の国ぶりなり。伊勢の国の北の三重の国の国ぶり歌なり。国ぶり歌は国の鎮魂の歌なり。ふりは鎮魂なり。鎮魂の目的を持つてうたふ。うたふ歌。つまり安積の采女のうたつたのは大体それと同じ。陸奥の安積のあたりでした習慣を宮廷でしたのだらうが、宮廷より采女が戻るのは原則でそこへ葛城の皇子が行かれた。もてなしが悪かつたので（国司の）その時安積の采女盃を持つて行き、片膝を葛城の王の膝をあて叩きながら歌をうたふ。これは短歌なり。これは名高い平安朝での歌なり。この歌鎮魂歌としては最も大事な歌なり。その歌がその

時にできたと伝へられてゐるが、これは奥州の安積辺の国ぶりうたなり。その歌は、

浅香山影さへ見える……

と

難波津に咲くやこの花……

この二つが平安で非常に大事にせられた歌なり。必ずこの歌を皆覚えなければならぬ。手習ひしなければならなかつた。さういふことは神を祭る一つの儀式なんだ。神の心をなごやかにする一つの儀式としてそんな歌を歌ひ、盃をさしあげるのが、諸国に少しづつちがつてあつた。それを宮廷に持つて行つた。宮廷に結局残るものは儀式以外にその儀礼に伴ふところの詞章（散文に対して律文）が宮廷に残る。だから宮廷の文学は昔から宮廷自身のものがあつたにちがひない。物語、ことわざなど。その他に地方よりいろんな意味の巫女が宮廷にもちこみ、残つたものがあるわけなり。それをば、平安になつて諸国と宮廷との関係もかはる。すべての社会の生活態度もかはる。すると今までの形式はだん／＼失はれてくる。だからその意味がだん／＼忘れられ結局平安の宮廷に仕へてゐる女は自分等がもと巫女なり。次第に忘れる。元の職よりずうつと離れたものが高く、元の職にあるもの位置が低い。その人たちは意味を忘れてゐても物語、歌、ことわざを宮廷で伝承するのが本職。これが昔よりの仕事なり。その仕事が残る。ところがだん／＼文学として飛躍し

なければならぬ時が来た。何だといふと今まで口で伝へ耳で伝へてきたことがさういふ手段をとらなくとも神聖味をなくせない。口より耳へ、耳から口へ伝はらなければ他の人が皆見るからといふ風なことに拘泥してゐられなくなる。それほど文字の魅力が増す。文字がはいりそめて長い間に文字にうつすと皆に知られるとおそれたが、そんなものにとどまつてゐられぬほど文字の魅力が増す。平安はそれほどぬものあり。が、大部分は書いて読む自由ができる。といふより書かなければならぬといふやうになる。それで女房たちが宮廷におつて、自分の出た国々の物語を書くといふ仕事を始めてくる。京都で生れた女房は沢山あるが、もとの女房の出た采女は諸国より出る。だから女房が諸国の物語を書くといふことになる。諸国の歌なりことわざなりを書き伝へるといふことになる。その以前は口づから耳に伝へた。天子なり尊い方に。誤解を招くといけぬからことわるが、宮廷の生活の延長は貴族なり。宮廷は自分の残りがあると皇族に配り、貴族に配る。これは昔よりの形式なり。采女でも舎人でもみな貴族に行く。だから宮廷で采女が女房になれば、貴族の家でも女房が出来る。自然／＼にかはる。だから女房文学の最初に考へなければならぬは、諸国の物語といふことなり。それで只今残つてゐる平安の物語を全部勘定しても二十いくつと数へてくればその中に旧作は沢山入るから非常に少ないわけなり。その平安の物語の

中に例へば大和、伊勢、なんていふ国の名をもつた物語がある。かういふ物語が采女から女房になつた人たちがはじめを書いた物だと古い時分に書いた物だといふことはできぬが、さういふ国の名を冠した物語が古くよりたくさんあり。その名をついで大和、伊勢、なんていふものが出来たんだと考へることはさしつかへない。大和とか伊勢といふものが直接にこれらの人のこしらへたものでなく、大和、伊勢、撰津の国物語、近江物語が沢山あつた。その考へ方が続いてきて、のちにもその形をおそふて行つたんだらうと云つてさしつかへない。それで順序とすると常に平安の物語といふと竹取、伊勢、とあげてくると、どれをあげたところで、平安の最も近い物語をあげることができぬ。だからいろんな要素を含む大和よりやる方がよい。ほぼ学問の推測ついてゐる。年代順によらずいろんな要素をそなへいかにも諸国物語の一として大和を上げる。

大和は作者がわからぬことになつてゐるが、大体に在原業平の子の在原の滋春といふ人が書いたといふ説と、花山院天皇（くわさんゐん）が書いたといふ説と（花山上皇）それから一つあつよし親王（敦慶）の女房の大和といふ女房の書いた説とこの三つが主だ。その内にこれらの調和した説あり。これらの説はほとんど根拠があるとは思はれない。さういふ説が古くから行はれてゐるが、それをあげるならまづ伊勢の作者として擬せられてゐる（一方の考へでは）宇多天皇さんの女房伊勢といふ人（歌よみ）が作者だつたかもしれ

ぬといふやうな考へだつて成り立つ。伊勢の父親は大和の守なり。伊勢には大和に関連した歌は相当あり。大和とも関係が深いのだから、この伊勢説を採ることも出来ると思ふ。ところがこの大和で見られるところははつきりと二つの形に分れることなり。諸国物語（ばなし）と近代のゴシツプ（うわさばなし）、その二つに分けられる。しかしやはり何といふても大和といふものの形式をまづ考へねばならぬ。形式として考へると歌が中心になつてゐて、歌のできた原因を説明するやうな文章を集めたものと見るのが本当だらう。さういふ風に歌を中心としてできた断片的な文章は歌物語といふ。長い筋をうる物語に対し断片的な歌を（これにことわざ）中心とした物語りをいふ。日本の平安において長い物語といつても歌を伴はぬものはないが、比較してみると、歌を中心とした断片的のもの、歌物語の部分にも近代のゴシツプにも歌物語の要素を備へてゐる。それはあたりまへなこと。ところがこの近代の噂話（歴史上のいろいろな人物、当時或は近代に名高かつた人、物語主として色好みの物語、さういふ物語の部分は多くのちの中篇物語（非常に長い源氏、宇津保を漠然と瞥見的にいひ長編といふ。それに対して短くまとまつてゐる落窪、住吉を中篇。その中篇物語に行く種を十分にもつてゐる。この点で見ると伊勢（大和より古いと信頼されてゐる）にもやはり今申した中篇になつて行くはづの近代噂話といふやうな要素と諸国物語を交じへてゐる。ところが伊勢といふものは在原の業平

の幻影が伊勢に濃厚に（今ある伊勢は在原の業平の幻影が濃厚に）か、つてゐるので、近代噂話の要素が非常に多い。諸国物語はほんの、十分の二、十分の三ない位だらう。これをよく見ると伊勢の中でも諸国物語的な部分がだん／＼ひろがつてくる。これも在原の業平／＼と思つてゐる。色好みの物語がだん／＼かげが薄くなる。で、この諸国物語の部分をはつきりとめてお話をまづしなれば、平安の物語の発足点はつかめない。だからこの側より申したいと思ふ。

（五月二十七日）

大和物語の話（続）　大和といふ名前の説明はこの間大体いたしました。平安の物語には名前の解釈のすぐ／＼のもの、つまり見た通りの名前のものと、どういふところよりついてゐるか名前のおこりのわからぬものとある。で、すでにこの間申し上げたことだが、例へば伊勢と大和と並べると、名前の上に国の名を二つながらもつてゐる。だから、そこよりいろいろな想像が出てくる。人によると、伊勢を先に出てゐると信ずるために、伊勢には国、大和といふ名をつけたと申すが大変よりどころあるやうでたよりない説なり。それには伊勢にはいろいろ伊勢といふ名のつく／＼よりどころあるも、どれも完全に説明ができてない。例へば作者を伊勢の御が作つたから伊勢といふと、或は伊勢といふことは伊勢びとはそらごとつくといふから嘘物語といふ意味といふ。或は伊勢物語の中にどうも伊勢の齋

宮の事を中心に書いてゐるやうに思はれる。だから、説によると伊勢の発端に昔男初冠して奈良の京に知る人してといふのにはじまらずしてある男が伊勢の国に狩の使ひとして出掛けて行くといふことよりはじまつてゐる本があるといふ。伊勢の方ではいろ／＼たよりないが、よりどころが考へられるが、大和物語は伊勢に対して出来たとすれば何か伊勢の共通な大和といふ名のつく原因がなければならぬ。この間申したが、ただ似た原因を考へれば伊勢といふ女が伊勢を作つたといふことができれば同じ伊勢が大和を作つたと私も推定が成立つとすれば、すると伊勢といふ人は大和の繼蔭つぐかげの娘だから大和の物語といへないこともない。伊勢が藤原の仲平の中將に捨てられて、大和国の親のところにかへつて。

三輪の山またも相見ん 年経ても尋ぬる人をなしと思へば

(第二句少し怪しいか)

さういふ歌を残してゐる位だから、多少伊勢が大和を作つたといふ理由は立つようだ。尤もそれにはも少し事情をそなへて申さねばならぬ。その事情の一とも思はれ、同時に反対の証拠となるやもしれぬが先日もこれまで普通あげれてゐる作者の考へに敦慶親王の女房が作つた。その女房の名が大和といふので、大和物語といふのだといふ説あり。この説はつきりしない。この本にはとらなかつたが大和物語キョセイシヨ虚静抄の著者の説だが引用確かでない。全くよりどころなき説とは思はれない。文章が引用してあるが、よりどころ確かでない。

い。大和といふ女房と或は宇多帝に仕へてゐた伊勢とが同人でないともいへない。伊勢といふ人は敦慶親王(この人は昔の女房の型を一つ写してゐる。時々相手のかかはつてゐるが)、敦慶に会ひ、生む娘が中務といふ女房なり。さうすると或は伊勢と大和といふ女房名が実は一人の人に二様ついてゐた名でないとはいへぬ。伊勢といふ名が父の繼蔭が伊勢の守になつてゐたので伊勢といふ女房名がついたといふので、大和もさういふ関係より、のちに伊勢の名になつたのかもしれない。

ところがもつとさきに申しておかねばならぬことはすでに国々の物語といふものの存在が大体に考へられる。書物として残れるものはないんだがつまり国々の歌を集め国々のことわざを集めるやうな計画がいろんな国々の物語といふものを生み出す。物語を記録した書物を生み出したことは考へられるのだからさういふ点でいふと伊勢は一番名前の伊勢物語の名前の起原としては伊勢の国の物語なるが故にといふ点で一番落ち着きが出てくる。

で、今日の伊勢を見ると伊勢の国の話は非常に少ないけれどもかなり重要なものだといふことを考へると、あながちに否定することはできぬ。すると大和でもやはりさういふ事情を考へていいいのではないかと思ふ。おそらく平安時分の書物を愛好する人が必ずしも、恋愛小説(中篇小説)なんかばかりに憂き身をやつしてゐなければ、さういふものが保存される機会が多かつたらうと思はれるが、中篇

に憂き身をやつしてゐたのでさういふものがあとより／＼消えて行つたのではないかと思はれる。これは後の話だが、例へば伊勢の中より或はのちの今昔物語の中より、或はその他の書物の中より近江に関する物語だけを抜いてきて伊勢が伊勢の物語を包含し、或は大和が大和の国の物語を包含してゐる程度位は材料が集つてくる。たとへ物語の名前の説明には役立たないとしてもともかく国々に伝つた歌、ことわざを説明する物語沢山ある。それが広くやられたらうといふことは、平安の文学史の最初にしめる推定として据えてよいと思ふ。

で、大和といふものを率直に申す。大和の国の物語をば収集してゐるといふ意味において、大和といふ名がついたのではなからうかと思ふ。だん／＼物語といふものは雪だるまみたいで、ころがつて行くのだん／＼大きくなりどこがもとかわからなくなる。すると又別の方より説明を試みなければならなくなる。大和には大和の国の物語が割り合ひに少ないけれども同時に多いといふことも出来る。大和は大体この間申したやうに昔の物語と今の物語とが集つてゐるわけなり。それで今の物語も貴族社会の（今といふてもついでこの間あつたといふ様なことであらう）に残つてゐるやうな事。つい現代だと考へる。さういふ範囲だらう。つまりわれ／＼常識で考へる今といふ時代、それから非常にはなれた時代と二つをくる。大和にくる今は貴族社会である。ところが同じ今の物語を含んでゐるもので、

注意せられるのは今昔物語（これは平安の末のものといふが鎌倉の色彩が濃厚になつてからのものなり）、これには貴族社会のものもあるが、もつと低い地下の人達の物語まで織りこんである。その点で今といつても、扱ふ社会がちがふ。今の影がさしてゐる。社会がちがふ。で、今昔なんかでもその他前からでも今は昔と書き出してゐるから、それであの物語、今昔物語だといふことになつてゐるが、今は昔は、今ではもう昔になつたといふことを意味するのか、或は今は昔といふことがもつと他の意味をもつてゐるのかもしれない。私は、今昔物語といふものには書物の名に二通りの意味あり。今では昔がたりになつてしまつたといふ意味にもとれるが、今の物語昔の物語といふ区画が物語にあるといふことを示してゐるのではないか。大雑把に二つに分けてゐる。今といつてもかなり古いところまで考へてゐる。のちになり武家が盛んになり室町になると中頃といふことを考へる（歴史觀念が発達してさう考へる）。かういふ風に物語が昔物語ばかり書かず今物語も書くやうになつて来たのはいつからかといふことはわれ／＼にはわからないけれどもかなり古いのだらうと思ふ。

物語の祖先といふと人は笑ふだらう。ただ一方物語の非常に古い形として考へられる靈異記りやういが出来たのは平安の初め（平城の御代、奈良の気分が濃厚に出てゐる。この書を見るとすべて話が昔物語でなく今物語なり。今といつてもわれ／＼が明治大正昭和を感じるやう

な今なり。日本人は今といふ時間を非常に延長して考へる癖昔よりあり。昔と今との対象を時代、世話と考へる（江戸になると、世話の中に二つ位の区画を考へる、町人、武家階級の世話物とわけける。時代物の中に王代物、普通の時代ものを区画する。大体二つにわけてくる癖はある。靈異記は、全体に今の世の中、われ／＼が考へて現代だと考へる範圍を書いてゐる。昔の物語では信ぜられないから、現実に知つてゐるいいことをして悪いことをして見て仏の報ひを受けた現代の話を書いてゐる。しかしこの傾向は靈異記より前からある。奈良時分の漢文で書いた中篇小説といふものが大凡題材を昔物語にとつてゐるが、だが万葉なんかを見ると物語を長歌ながたに訳したものあり。さういふのを見ると、やはり古物語が多い。ところが短歌を沢山ならべ物語の形をこしらへたものあり（地の文章を少しも使はずに）―悲痛な恋愛関係におち入り苦しんだ男、女の物語といふやうなものなり。中臣宅守、佐野茅上郎女兩人の歌の掛け合ひといふものは非常に沢山ある。これ一種の私は小説的なポーズを持つてゐると思ふ。その他これに類似したもの、万葉の中に考へられる。さういふ風に考へると今物語のかなり古いところまで行ける。つまり昔の古い物語ばかりしてゐるのに飽きたらさうして最近世の物語をするやうになつて来た。さういふ傾向ができてきて、だん／＼記録されたものにもだん／＼今物語にあらはれしてきたのだ。この大和を見ると今物語が非常に分量が多く、昔物語が非常に分量が少ない。

正確に云ふとあやまりを生ずるかも知れぬが大体において大和で見られる今物語は貴族の間の出来事を扱つてゐる。昔物語は諸国物語である。

つまり宮廷のほひの少ないものなり。わりに宮廷の貴族のほひをわけやうとすればつけぬこともない。さういふ話が凡そ二十篇ある。二十篇を分類する（わけてみたつて仕方ないし、唯今のが昔のままかどうかはわからぬ。いろ／＼大和の段、章には出入がある。正確なことはいへぬが）。凡そ二十篇の物語を分けて見るとその中、普通の段の分け方にしたがふと七つまで大和の物語。摂津の国の物語二つ（これは動かせぬ有力なもの二つ）、東国の物語が五つある。つまり東の物語、陸奥の物語をこめる。海道を下つて行く。業平の息子の大和の作者と推定される滋春が海道を下る。あちらこちらで詠む歌に関する物語。それから下野国の歌。それから武蔵国の歌。それから陸奥むちのくにの国の歌といふ風にして大体五つあつたと思ふ。それから筑紫国の物語が四つ。これ四つといつても連絡して考へれば一つになる。檜垣ひがきと云ふ地方の遊女とも何ともわからぬ女だが（私は遊女と思はぬ）、檜垣ひがきのこゝをば四段に分けてある。それからこの京都と地方との交渉をしたやうなものがある。兵庫の頭で但馬の国に女をこしらへた話。その男が紀伊の国に下る時に女より歌を送られた話。つまり京都と地方と関係した話がある。或は陸奥むちのくにの守だつた藤原のさねき（真樹）の愛人に送つた歌の物語。これは陸奥

の守、そののち陸奥国に行つて死んだ。陸奥国のことは歌物語に關係ない。陸奥の守として奥州に下り奥州で住む（警城、警代まで行き死ぬ）、それが京都にゐた時愛人と贈答した歌。

かういふものを探してくると大部増えてきませう。まあ大和以外には摂津の国が少し目に着くだけで外は非常に少ない。つまり要するに大和の国の物語、摂津の国の物語、陸奥の国の物語（東の物語）、この三つが二十篇の中の有力なものなり。で、さういふ大和の物語があつて或は想像することが許されるならもつと大和の歌物語が集つてゐるところへ外のものをだん／＼かかへてきた。そしてそこへ更に今物語が入つた。諸国物語の上へ今物語が入つてきて、大和が大きくなつたと。かういたしますと大和の成立はわりあひ簡単なものなり。さう考へることができればわりあひ簡単なり。

で、大和の中にたゞいかにも今物語の分量が多すぎるのでわれ／＼がそれに幻惑され、昔大和ができた時分、大和のはじめの形は簡単であつたのにそれが非常に大きく育つてきた。そしてどうして大和ができたか、わけのわからぬやうになつてしまつたといふ風に考へれば、まづ一つの考へとして成り立つ。さう考へて少し説明する。まづ大和の外に目につく摂津のものよりあげて行く。

摂津の物語は名高い。生田川の芦屋処女あしやのむすめに対して恋ひ争ひをしたもの、それから一つは芦刈あしかりの物語、この二つが出てゐる。この二つともわれ／＼が考へてゐる芦屋のうなひ娘子の話、芦刈の物語なん

かよりずうつと成長してゐる話のやうに思はれる。芦刈は大和が出てゐるところでは古いのだからわれ／＼の考へてゐる形といふものは、それからのちに出てきた各種の類似の話、歌が大和の芦屋の物語がどの位の古さにあるか判断がつく。つまり普通の国文学と扱ひの違つた扱ひにおいて、芦屋のうなひ娘子の話は簡単。万葉にある。幾種類か出てゐる。万葉に出てゐるのと大和と比べる。非常に発達してゐる。おそらく、おそらくこの二つの物語を見ても、非常に小説的な延長（小説はたゞの物語でなく筆を以て文学的の動機、もちろん有機的にせる文学的の動機で書いてゐる）、それが濃厚に見えてゐる。それにより話がずうつと延びる。ところが大和につきて考へなければならぬのは全体がならして一つではない。けれども今物語と昔物語と比べると大体の文章がちがふ。文章の書き癖がちがふ。私はかういふ風に考へる。大和に集つてゐる物語の多くはその以前にあつた書物より抜き書きせられてゐるのだらうと思ふ。或はこれらの物語が大和そのものの中で育つてきたのかもしれない。大和物語の中で成長したのかもしれない。（外の本より書き抜いたのでなく）。それにはもつと細かく云へばそれを書いた人が聞き伝へた話が昔のより発達したことを考へなければならぬ。それと同時に書いた人が文学的な経験により脚色を加へて潤色してゐると二つ考へなければならぬ。

それから、陸奥むすの物語の中で一番陸奥らしいものをあげて見れば、

少し判断がつくだらうが、かういふ話が、昔大納言の娘いとうつくしうて……帝にたてまつらむとてかしづきたまひけるを……（綺麗な娘を参内させやうと思つてゐた）、ところが宮廷よりいただいた隨身武官で内舎人の某がその娘をどうして見たのか見て、何にもわからないなり。切に一つのトリツク考へ、ぜひともお話しなければならぬことがあるといふと、なんだと音を出した。一寸顔を出したのを、それを抱きか、へ馬にかへ（これは更科の竹芝と殆んど同じ。竹芝は単純だが、昔物語らしい条件がついてゐる。娘が聞いてゐるところで計画的かどうかからぬが、酒壺の上に吊すひさがあつちのはしにあたりこつちに……（などや苦しきめを見るらむ、わが国に七つ三つくり据えたる酒壺に、さし渡したるひたえの瓢（ひさこ）の、南風ふ吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見て、かくてあるよ）……勢多の橋板をはがす。飛び越えて逃げる。自分が飛び越えたら人も飛び越えるだらう……

浅香の山（この時分の奥州は磐城、磐代が主として考へられる）に庵を作り、この女を据ゑ、山に隠れ、里に出て物を探し食べて、男行つて、行つてしまつたあとと娘は一人でさびしく隠れてゐるうちに身ごもる。男が出掛けて行き、三、四日も戻らぬ。待ちかねて山の清水のところへ行き、自分の影を見ると、こつちへ来て鏡を見ない。わがありし形にもあらずあやしきさまになつた。今突然と見た

のでびつくりして、はづかしと

浅香山影さへ見ゆる山の井のあさくは人を思ふものかは

（浅き心をわが思はなくにといふ歌のちがつた伝へか作り変へか。私は作り変へと思ふ。浅き心をわが思はなくにといふ名高い歌あり。

（これ手習ひ歌）

とよみ、木に書き付け庵に行き、死んだ（首を吊つたのか）。男が物など求めて来て死んで寝てゐたのでびつくり仰天して、山の井の歌を見て帰つてきてこれを思ひ死に、傍らに臥せて死んだ。

かういふ風に書いてゐる。すると昔より伝へてゐる葛城の王おほきみが奥州に行き国司の取扱ひわるかつたのを怒る。采女が来て皇子の膝を叩き歌つた。その歌のできた境遇とすつかりちがふ。だから歌は歌として別にあり別にあつた物語とくつついたといふことがわかる（歌物語といふものか）。歌の出来た境遇がわからなくなつたのちに歌がくつつくから（どうしても歌物語は歌とびつたりしない。はじめより歌と物語と別にある。その歌がどうしてできたのだ。或は歌の意味がそれを説明しなければわからなくなる。すると説明するため出てくる。この物語は創作でない。何か物語の類型は皆もつてゐるからその類型の中に歌にはまりさうなものを自然に推定してできる。それで歌物語はできる。これは歌のできた真の理由を説明してない。これらは新しい歌物語。しかも平安で見られる竹芝の物語とよく似てゐる。同じ平安の時代を経て出てくる竹芝、昔の物語と似

てゐる。して最後はこんなに悲惨に終つてゐる。

で、さらに行くとは何も竹芝、昔の物語がさういふ物語の類型の一番古いものではない。つまり尊い無力な皇子さんとか姫さんが諸国を流浪して歩く。その時その流浪を助けて歩く者がある。その物語がだん／＼展開して行き、女であるとその世話をしてゐるものはそのお姫さんとの間に恋愛関係ができるといふ話になる。その話の中でこれは講談において思ひきり飛躍してゐる。さういふ飛躍が、撰津の国の二つの国の物語にも含まれてゐる。大和の国の物語で見ても、伊勢と共通の材料、ほとんど伊勢、そのまゝ、みたいな材料が使はれてゐる。

昔ある男が非常になかよくしてをつた女房だが一緒に住む内、新しいのが河内にできて、いつも通ふが、女が機嫌よく送る。おかしいと思ひ蔭に隠れて聞くと、風吹けば奥津白波と歌ふ。そのち男は女のところへ行くのを止めた。大和になるとその話が十分延長されて来てゐる。まあ、大和の筋をいふと沖つ白波まで同じなり。

風吹けばおきつしらなみたつた山よはにや君がひとり越ゆらむそんな歌を作つたのを聞いて男がなくなつた。女の家は河内の山を越えて行つたところだまでは同じなり。それより大和はこれを延長して、なほ監視してゐた。すると女は又起きてきて金の鏡かみに水を入れそれを胸にあてがふ。すると水がたちまち水が湯になり女は捨てる。又女は交換して水が湯になる。つまり女が湯になるほど煩

悶してゐるのを男は知らなかつた。かき抱きて寝にける。かくてはかにも行かざびつたり女につゐて、しばらく行かなかつたから（しらぬ顔してくらしてゐたが）、河内の女のところへ行つたところが久しく行かざりければ、女の家へ行つたが入りにくくて外に立ち垣間見すると、俺が前に行つた時は化粧して非常に美しい着物を着てゐたが今は変な着物を着て玉串を挿し（下品な服装）自分の手で杓子で御飯を盛つてゐた。

（人の妻だつたんだらう）。非常にひどく嫌だと思ひそれより行かぬやうになつた。こゝらで業平なるを示したのだらう。この男は王おほさまなりけりとある（皇族）。

伊勢の他の段を併合してゐる。いくらでも延長できる（舌を出してなめてゐた）。その延長が、自然の延長が、大和の作者が濃いといふほどではないがある脚色を考へて書いたものかといふことは判断できぬ。つまりわれ／＼が物語を聞いても読んで覚えてゐる形は非常に粗漏な形なり。再現する時には聞いた通り読んだ通り出さぬ。はつきり出さうとするから外の物語が結びつき、その物語を完成さす。何か物足りなく記憶の不確かなところあればそれを確かにしやうとすると他の物語がつく。そのことは物語る時も書く時もある。だからこれだけで書いて延長したとは決められぬ。しかし、ともかく伊勢と比べると伊勢の話の方が単純だといふことなり。

この風吹けば竜田山といふ部分だけでは大和はあとのものだといふことができる。で、大和の物語はこの物語と、それから男が女を愛しなくなつてから、も一人女をむかへ、自分らの寢てゐる両側に女を住まはせ、こちらの部屋で壁を隔て泣いたり笑つたりする。お前はどうかと思ふかと男が言ふと、歌を作る。

我もしかなきてぞ人に恋ひられし今こそよそに声をのみきけ
それで男が後悔して新しい女を捨てたといふ名高い話（二五八段）。それから、奈良の帝の物語。奈良の帝の物語が四段あるけれどもこれを一段に出来ぬことはないが四段にする。

奈良の帝といふのははじめに見て行くところの天子でも良ささうだがしまひは嵯峨天皇と対照と書いてあるからやはり平城天皇となる。奈良の国の古物語だがやはり宮廷の物語となる。その物語は大和の猿沢の池の衣かき柳の話。采女が池にはまつて死んだ。これには衣を掛けて死んだとはなつてない。（この時代には衣をかけることはない）

我妹子のねくだれ髪を猿沢の池の玉藻とみるぞかなしき
天子の歌の方が古風なり（割合に平安朝の歌）。

猿沢のいけもつらしな我妹子がたまもかづかば水ぞひなまし
（これは万葉の卷十六に類型が出てゐる）

猿沢の池まで宿かへしただけなり。耳成の池、玉藻が修飾になつてゐる。

やつてゐて池の中に潜り込んでしまつたらと単純にいふ。俺が水だつたら乾いてしまつたのに、この水は馬鹿な奴だと怒つてゐる。さういふ風に調子なんかに対し昔の人はかまはなかつたのが、猿沢……。

ちがふのだ。とにかく猿沢の池もつらしなといふ様なかういふ歌に物語がついてゐたのだ。この歌は必しも、耳成……の歌の記憶の誤りならぬ。これと同じところに出たので新しいのはこの作りかへといふのはまちがひ。同じやうな歌は諸国に行はれてゐるからあるところでは古い形を残しある所は早くよりかはつてゐる。だからそればかりでは申されぬ。

大体にこの今の猿沢の物語は全体に先の話なんかとちがふ。いかにも宮廷味を持ち宮廷式になつてゐる。

同じ帝竜田川をいと興深く御覧じになつた時。

これは万葉になる。人麻呂の方は万葉調であとは時代がちがふ。昔の人は平気なのだ。

かういふ風に同じ大和の物語の中にも、すでに昔物語の形が今物語にかはつて行こうとしてゐる形を見せてゐる。昔物語の形でありながら宮廷貴族の物語を主題にする今物語に近づいてゐる。（だがこの形でだん／＼行けば今物語はくつついて行くのがわけもないことなり）。（六月四日）